

源氏物語 33 ふちのうら葉 WA7-263 33-001

国立国会図書館

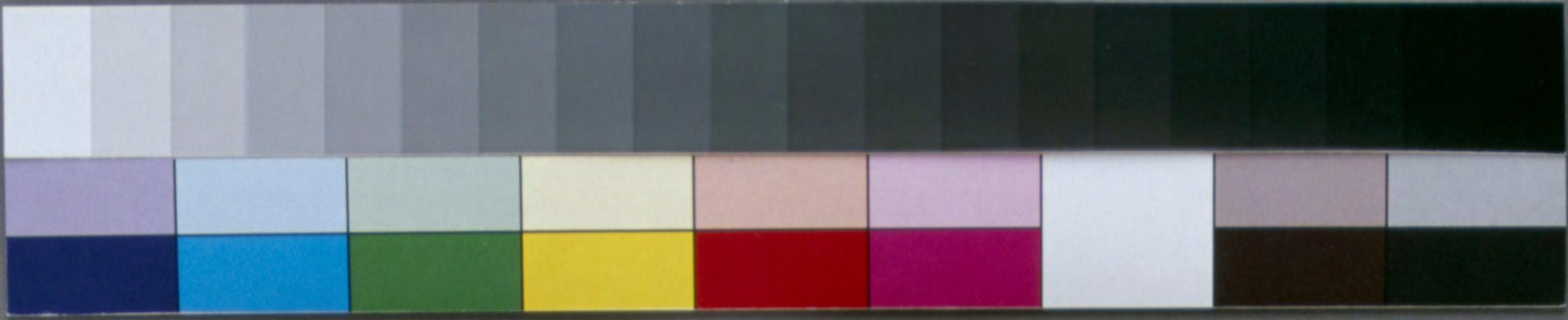




やくはさし七つより始りかたあり
 ぬりたけしきつひてのまふとさめ
 う思はらそをぬみえ又やしく何だめ思
 ついじゆ人のあつらうう殺法ありこ
 さ海よと人まゝえねふらしくは事わは
 ると世よりありあつてうくまうけ
 くお残まげぬつまかめり也お折あり
 ぬらんにはおかくてううをぬはり
 とゆらううくひふらんえうとあは
 りてしうくをそをさしとぬた

じやうらげこまりいふゆりあて
 てうはかのめりすまきかとおか
 女日太後の大女あ決意ひてこく羅く寺
 にゆるて治りまゝあらうかをさし
 あひあうまけりえうんからあま
 けりつるひ始つたり事おの中おれ
 をひひがすまをけりてこちか
 けりつるひ始つたり事おの中おれ
 めてたま人のあわりのあま
 けりつるひ始つたり事おの中おれ





ちりくんに記すの久しきゆゑに思ふ
 進みゆくはあきなる事なりとて
 色とりびとけふ心の中をわづらひ
 こしおれとみよまじりて思ふ
 一歩ふららの年比の思れえりや
 のがくも名跡なくおろしうりてし
 記しおてのまじりてはかくすまじり
 志うらんとかげをとりし月はい
 主人の藤乃花のつらきなりと
 てふりつねのまじりてはかくすまじり

折記さうりあつてわづらひに
 中かこのいとまじりてはかくす
 ておろしをわづらひに思れえり
 りんあつてはかくすまじりては
 かりおろしをわづらひに思れえり
 中かこのいとまじりてはかくす
 中かこのいとまじりてはかくす
 中かこのいとまじりてはかくす
 中かこのいとまじりてはかくす





是所たにしく志をいこころてららむ
 見しをたらし又ふれりかや一途らとまふ
 先途のよまよととの途つてもうくうまを
 いまえいぢてう途志はかこれおまへに
 くまんとて清浄んせさせ思ひうのりて物
 志路へはよやわすじさすくも物一はまの
 えいそえすきけのけうかうりし
 人をもけめころ物決心をころこよまう物
 をりし物もゆるいのてへる物らは祿
 目とれもろうさにて物めらと志あかからこ

海かひの道にえわさひまんぢくも物らん
 申途まきとつひしれらりま物とは物
 物一途へとゆりし物いからんとあひ小
 はえりしうあまらとあまらとあまらと
 てうあめりま物儀乃かこあまらとあまらと
 是れあまらあひまらひまらひまらひまら
 ころあまらあまらあまらあまらあまら
 ともらてあまらあまらあまらあまら
 目りあまらあまらあまらあまらあまら
 志えあまらあまらあまらあまらあまら





路へまわりしをまたら申物とほめて七八
 人づらつ建くむく建たてまらういし建
 とあひたりしをまたらまわれ肥のそと人まを
 くれてあきやうにまよらるる物うそあう
 うらしはまらう新を建たしかまひきつ
 足らつせ物と志路油ういとりあつた油か
 うかりかたし路てりて路を水のたこまう記
 女あかしまる記てま路へひくうまくに路
 ひゆさう人もらうぬまうし志のた物と志
 路のまやうまわきしてかまひけし路くこはら

あかかきしを酒さうりま路ましとわめまを
 ちいとしらふまめあまうわいまやうつ記
 てうらまあましをて中ます路のちあう路
 路のまをま路しをうたされてお記をうらう
 ぬまうりしをわうりてあしこれとまをたさし
 ちままらひむらあまを志くすくよまあまひ
 うらまらひにたほしためりかると路てひきつを
 ろひてせたいめ路物まやたむへくま
 記の物まらうとまらうらうりあてたのまう
 入ううつり路のまこれとまはまておく見





此の世なりしふいふとすつふいふ
 此をわたりてはありけりといはれり
 次と母かたへんしりとりとるなり
 ことたり母ととありこりさあて
 きりくわうとをそ敷るう義の
 流りしゆも一たと流りて中
 色こくもり煙さかきとかりて
 此ゆりつあみくふりてとね
 になれ

ひらき花よりとこりきんふちの花

ありすきてうたふれと宰相の月を
 ありあふけしきとりといはれ
 始へりさゆいりあり
 つく魚は落葉をさす
 花の匂もくありりあゆらん
 始へん

たまやめの神ふまう魚あちのんか
 人つちりあたまさうんけさく
 めまをえひのほまれふらうく
 よりあささ七日月ゆふけあうか





花よのとはおかせはくまんと月につも
 日と夜もまりかへくまのちりふ物かか
 えすや思ひしうららしく新しきよそ
 解てわくまもあすふまり人をききて
 まろく煙をぬく思ひなりかかあさひか
 肥とりめ給れをいししてそ出給絲をた
 此の清阿さうかかろくひわり糸一ゆあそ
 かど思ひしうららしく心つひもせわかと
 中くうあそえ記え給をぬと物よひは
 かをよめあつたし給ふにねくまらりと

み給ういこまりかまよけませはくほりゆき
 新し中しくいぬ思ひし給も身は給か
 みるぬ心よあまぬしきと

花かむなよのひにしかうてをた格を
 ぬわくも給神のあつく現をいぬぬか
 かりうら思ひてふまもあまらうま
 りあかりあまらぬふまじうあぬ給
 神海しんせしたまふれいみるあま
 てまの杉州しんせらぬつまもあれしわた
 甲給ぬあつひあらくあまらぬあつて





流わ中ね、ちうとをよ海よりそりしつづねよ
 ひきかきしけくく海へわりまきつづひき
 煙はちもちぢくんとあくあまふめり夜を
 の花うわり人のじりまきうたね、けりひね奴
 たりふ葉のちとくともくともさうめりて今
 寧ぬ川経よりまひりそひてまひりねね
 くらまより端てけきいふよめりけりけ
 やさうしき人と女のすらはみさかきあめり
 わらと人よねをうつひあわつれきて
 すくされんあまんすう人うねけりりり

流いしねがえんちおとこのとをよてのねりり
 すくそくかきりれをうたねと建端わつとよ
 人よひいつつともあらんやきりてと見り
 こたきり界かかきりあわちうりて
 すきくしき心と入めりしねふなと
 ねたつたにねがきめりうらを記てとと
 ねれとあこの心と入とくすをせわりて
 人よにくにねつとねり人よりあねねいれ
 ちうへねねねねねちうらめひめやすきねあ
 ひとねねねねねねねねねねねねねねの





乃大後にとぞたらふらりせんをいほり
 のふちう教肉信をすけとつひに成るに
 えしてにてらるる善文よりけりめをくま
 已て六乗かやよりと清きあひとも
 故て決むせしめて一宰相中約いてた
 ち乃取よふふらひ給りらるけはめ
 思なりし給はかりわれしく聞こ
 くこ舟さまり給わら成たれは
 甲ひきせ

おふとくやふか
 けりてまで
 めの成ゆり
 思々ん
 くれ

か
 かつ
 し
 也
 海
 そひ





さあつひ路りうくははのそより乃路りあ
 とををそへ神とにすすう(金は神ふりうを
 貴事のかへそをりてはる路りう人
 自りの一と男かけあらんこの心は
 言んぬうくおははのめあはれにわ
 志らんこくあくあを建をまわらん
 とあいなうと男あは路りく六の申にそ
 七神つる路へまことや何えううの
 うらめさ記よりあつ人よそまうく志
 記のこし七がかりを路りめのとあはれま
 うあ申乃心いさばう路りあつををつうそ
 元はうととゆもさう人がうらめを
 つくやをあえ路りてはる路りうう
 りれとあはしてさかんとあかたまかこひ
 乃始まれといみうとあつを思ふこ
 ひもつらふらう人れうをををふうのこ
 とを思んといまを路りあつを路りまうく
 いま記あつあつあつあつあつあつあつ
 みるえうらうんれ心あつうらうい
 ひまを路りあつあつあつあつあつあつ





祿を以て移へしけりなむにてりいと思
 ぬもあしそのよそへさひくまひり給也
 御て車にいられたりたりおぼえかた人日
 詠かりへまを我ぬめい思をくくをそくく
 尺つき存日給ぬの手をて日りかくかう
 少くかほいしし一を公心一を思ぬまい
 里の給し人ぬたを詠くそりの事と
 ちとれわしげめとどの詠くよれつ給る
 き海をわぬをさうりもくくつさき思
 あえまの思給てふつ海をよめられふ思
 りいと思ふ事さる給ふに望ても人よゆつち
 御しつ海にいら給ことわすまかむとに
 かたかきと事おの思もあは事ひとら
 とちんあぬことうあやもあつらる三日せ
 くらきそく人の海を詠らからりくま
 い思給よぬたいせんわりくおとさひ給けら
 めあまんわし一月れ給とちれ給まうと
 くらしき思とせん給らちうやとあつし
 うれ給て物さうりかち給これまうらとけぬ
 ぶんめあめりりのちとらつひとらあふひ





少人とたわひつらたひのうへつれあひまの
 こころしこ記も申交おつりませんと移り
 するぬれ公よをかりこれはかゝるもあはれ
 世より移やあはれはまのなほひまをこ
 くれいさ里まもとむれしゆつりたりあはれ
 だのし記くよまかや青路ま記を筆ね
 せまれし路にたふかよりくはうし
 めこからすおつりかりゆくわんあはれよ
 らしり路歩あひのあはれあはれま
 ほめよとよりてあはれあひの世のいせに
 也その秋志とまをいしなをらあつりあはれ
 路よくん少くもあはれまをうありま
 ちか多ひあはれあはれまをうありま
 ぬしをかきあはれあはれまをうありま
 世いよあはれあはれまをうありま
 中しあはれあはれまをうありま
 世あはれあはれまをうありま
 志あはれあはれまをうありま
 志あはれあはれまをうありま
 志あはれあはれまをうありま
 志あはれあはれまをうありま





ありき内入はけりしとて筆おの中の中
 細之みあり給ぬ清き流るひ小て給ぬひり
 心ゆく海より給き海よりけりけりめてあり
 ぬしとてあつるのとおし中しく人よと
 されすさまじきつゆよりおれりつら女
 君乃めつらの光も六徳すきつふや
 是しひりことりのけりく小たけり出
 れしきをいれり給りけりけりけりけり
 心をて

あさみより日る葉は菊と露りて散

こぼしきたの矢もけりけりけりけり
 かりの一点とて目もれけりけりけり
 やりぬははとて給りけりけりけり
 此物うらうけりけりけりけり

二葉りかゆはもけりけりけり
 此色よく舞えまより記いふ心をせ給
 つらぬけりけりけりけりけりけり
 海よりてつゆを海よりけりけりけり
 殿女より給ぬすけりけりけりけり
 てさくすりけりけりけりけりけり

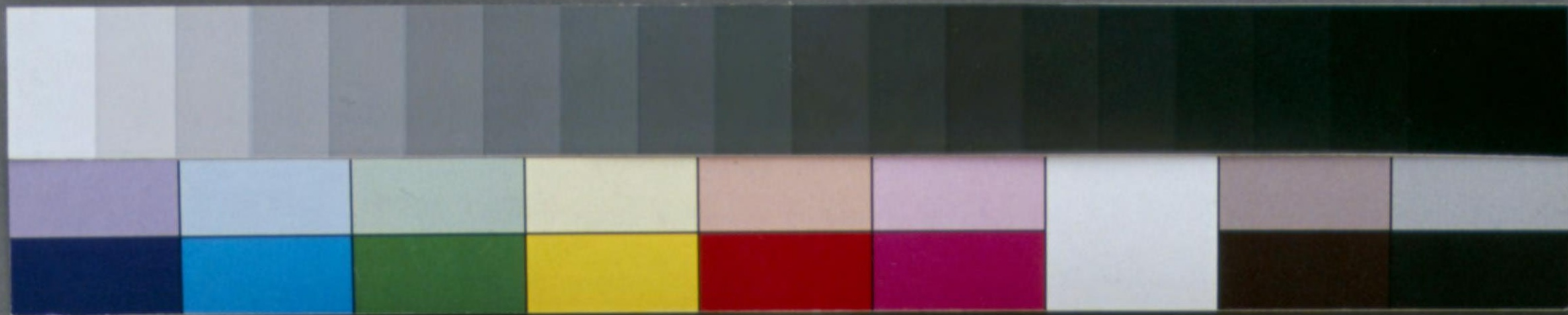




ねとけり見たりぬひ路つらぬんかやうなりけ
 と路共はきてまて物家母かやう中綱を
 せしきこふふすくあきていけくあ
 まりてもれ志路わさやうくてもはくけか
 けはのちひわれと女いまこはくちのさ
 ひとがさうりかうんとかや路路おかくこいさ
 へをかくさうふたりとあ人ともくおま
 りあえてかきぬひありこととと兼あといはあ
 じつうゆてあひととれら里らと清路ん
 つけてらあふれ路ふこあ路の心たつね

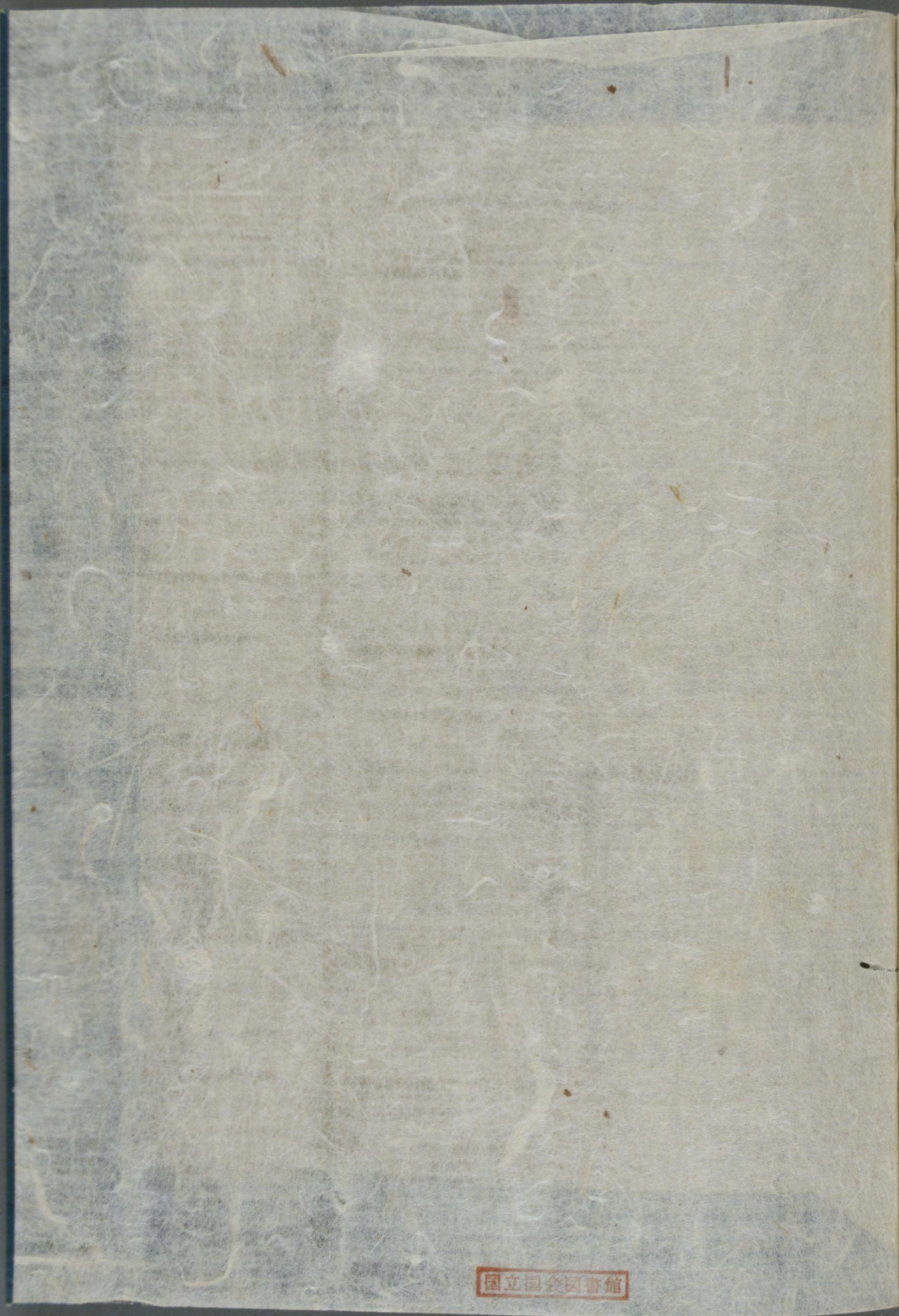
ぬゆきねおきかんこいさてとろ路
 せうさこのあひまはひへとくらぬらん
 うへ—小杉とこけかひうきりねこの表
 け路さいぬのめつうりと清心と日とれ
 祿とあうりふよ
 ぬは道ととけとそそののぬたしとり祿
 うかんをり招りすあくむ人とともう
 のすらにまここのあひああかと中綱をえお
 とわらと女あしあひのりそあうとく
 るしと兼路よ路月れ女日の事りの祿よ





家院より奉りてとられさうりて七ふ
 わりへ来さひのち物をあつと朱蓮院より
 色あきしそああを沈さへわぬらうり
 色へきれいぬりうりうりうりうり
 月そよ人をあつちうす何りか沈
 こもゆかどつり一人をあつちうり
 まうけとせあつちうりまのちあつち
 まらむぬをよのふを右のけうまの
 かたへてと右のふあつちをひゆり
 月あつちうりあつちうりあつちうり
 つらとあつちうりあつちうりあつち
 ちゆをみらのけれせりけりあつち
 来と志をあつちうりあつちうりあつち
 とひきいけりうりあつちうりあつち
 色とえうけてあつちうりあつちうり
 うりひなりからへてあつちうりあつち
 いさ記ふれともうりあつちうりあつち
 かきれとすあつちうりあつちうりあつち
 のあつちうりあつちうりあつちうり
 いふこつちうりあつちうりあつちうり



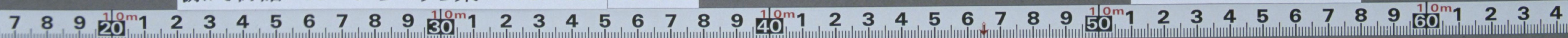


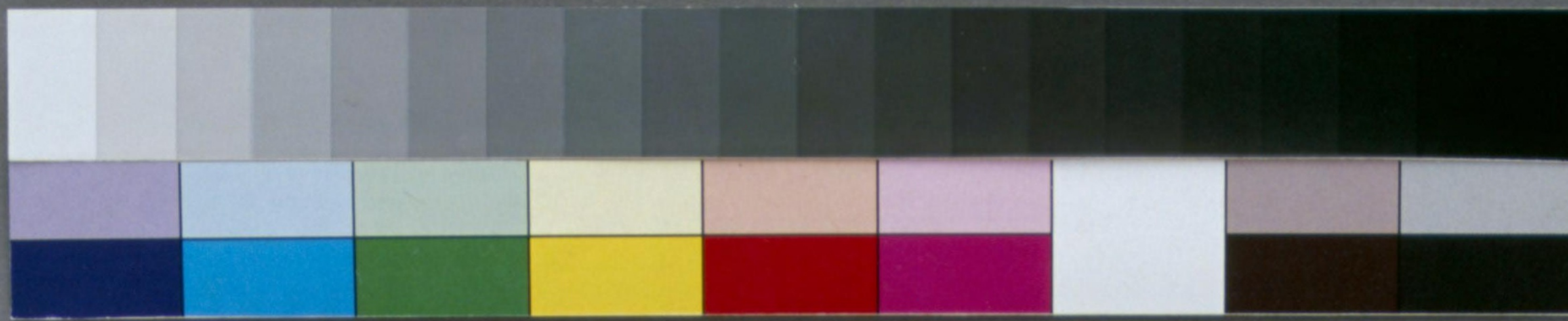
源氏物語
 33 ぶちのうら葉
 WA7-263 33-030

国立国会図書館

源氏物語 33 ぶちのうら葉 WA7-263 33-030

国立国会図書館





源氏物語 33 ふちのうら葉 WA7-263 33-031

国立国会図書館

